

インドネシア・アンボンにおける 世代別アイデンティティの特徴と教育に関する考察

中矢 礼美

はじめに

本稿ではインドネシア東部のアンボンの人々のアイデンティティの特徴を社会変動と教育変遷の視点から考察する¹。アンボンは、歴史（親オランダ的傾向）、宗教（イスラムとキリストの拮抗）、政治（南マルク共和国独立運動）、経済（開発の遅れた東部における州都）、近年の宗教抗争に対する国際機関による復興支援、教育（平和教育）といった特徴を有する。このような中心（ジャワ）と対立的な歴史を持ち、開発の遅れた東部という周辺でありながら周辺の中心にある地域において、人々のアイデンティティがどのようにあり、教育との関連について考察することは、インドネシアの教育に対する理解を一層深めることにつながると考える。

インドネシアは大戦後に独立した若い国家であり、多民族国家であることから、学校教育では国民形成のためのパンチャシラ教育（建国5原則パンチャシラ精神を醸成）が最重要課題として取り組まれてきた。そして国家スローガンである「多様性の中の統一」の具現化を目指した国家カリキュラムに基づいた教育が行われてきた。例えば、宗教科では各宗教の教育の保証、低学年における教授用語としての地方語の使用の許可（ただし主要な地方語のみ）、教科における多様な地域文化の特徴の教授などが行われていた。ただし「多様性」の保証は国家統制の下、画一的な形態で行われるものであった。その後1990年代後半から地方分権化、民主化、グローバル化という激しい社会変動が起こり、それに連動したカリキュラム改訂、カリキュラム開発における地域裁量の拡大によって、学校教育には地域性が生まれてきている。

本稿は、このようなカリキュラムの変化が人々のアイデンティティにどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。特に、国家、地域、民族アイデンティティとそれに相互に影響すると考えられるグローバル化に対する意識の四つの領域に焦点を当て、世代間のアイデンティティの様相の違いについて明らかにしたい。

これまでのインドネシア人のアイデンティティ研究においては、政策、観光、教科書、伝統文化、生活スタイル、言語など多方面から検討されてきている²。そこで主に述べられてきたのは、ナショナル・アイデンティティの創造とともにエスニック・アイデンティティが自覚・形成されてきたこと、エスニック・アイデンティティは政治的にローカル・アイデンティティにすり替えられてきたこと、都市での多民族の混合、

都市圏の広がり、近代的な生活空間の広がりといった社会変化によるアイデンティティの多様化、個人主義化などである。これらの先行研究は、マクロ、ミクロなレベルでの詳細な資料分析、フィールド調査に裏付けされるものであるが、人々が抱くアイデンティティの様相を計量的な実証研究と共に検討しているものは未だ限られており、地域別や世代間の傾向は検証されていない³。筆者もこれまで政策研究および質的調査に取り組み、地域科を中心とするカリキュラム分析、授業観察およびインタビューから教師の教授活動（教授内容、発言および態度）が児童生徒に与える影響を明らかにしてきた。その結果、教育内容、教師のバックグラウンドや能力、生徒との関係性などが相まって、地域科の目標（地域愛の醸成と地域開発能力の向上）が達成される場合とそうでない場合（地域のマイノリティ文化の周辺化）があることを明らかにすることができた。しかしここでは児童生徒のアイデンティティを世代の傾向として包括的に捉えることはできていなかった。そこで本研究では計量的調査により、各世代のアイデンティティの傾向と教育との関係を把握することを試みる。

以下では、まず各世代が経験した社会変動と教育の特徴を示し、調査方法・尺度・基本属性についての説明を行う。次いで各世代のアイデンティティの様相を明らかにし、各世代が経験した社会変動と教育変容から解釈・理解を試みる。最後に各世代が抱くアイデンティティや意識の間にはどのような相互関係があるのか、教育とどのような関係があるのかを検討する。

1. 各世代が経験した社会変動と教育の特徴

本調査の対象は、4つの世代区分に基づいて行っている。以下、各世代の経験した国家的あるいは地域特有の社会変動と教育について示すこととする。1970年代後半からのスハルト時代には、「国民統合重視教育」、つまりパンチャシラについての理解と実践能力を有するインドネシア国民形成を強く意識した教育が行われてきた。その後94年より地域科が導入され、州の裁量で地域の伝統文化、言語、歴史、地場産業などの学習を通して地域愛の醸成と地域開発を志向する人材の育成を目指す教育が行われた⁴。98年以降は、新たな民主主義的な国民国家形成を目指した民主主義教育が進められ、2004年以降はコンピテンシーを基盤とする教育、いわゆるPISA型の能力育成が目指されている⁵。また、アンボンにおいては、抗争後（2009年以降）に平和教育が抗争再発防止と地域愛醸成を目的として実施されている⁶。

調査対象とする世代は以下の四世代であり、各世代の受けてきた社会変動と教育は概ね以下のとおりである。第一世代（中学生：12-15歳）は抗争期に誕生し、小学校時代から地域科教育、民主主義教育、コンピテンシー教育および平和教育を受けてい

る。第二世代（大学生：18-22歳）は小学校入学前後に抗争を経験し、小学校時代から地域科教育、民主主義教育を受け、中学生頃からコンピテンシー基盤の教育および平和教育を受けている。第三世代（保護者Ⅰ：36-45歳）は21歳以降に抗争を経験し、地域科教育は若干名が高校時代に1年程度受け、大学に進学した人が民主主義教育を経験した。第四世代（保護者Ⅱ：46-55歳）は31歳以降に抗争期を経験し、スハルト体制期の国家統合主義的教育を一貫して受けて育った世代である。

2. 調査の概要

(1) 回答者および調査方法

2013年11月12日～14日に、アンボン市内の国立中学校2校の生徒160名、保護者160名および大学学部生（教育学部、社会学部）100名を対象に配布回収方式、無記名式の質問紙調査を実施した。質問紙の配布は、各中学校ではランダムに選ばれた1年から3年までの生徒を二つの教室に集めて行い、保護者は学校および市役所での筆者も登壇したセミナー後に配布し、その場で記入を依頼し、回収した。大学生には人文社会学系の学生の1年生から4年生にランダムに配布し、後日回収した。

(2) 尺度

本調査では、アンボンの人々のアイデンティティを捉えるにあたって、ナショナル・アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、ローカル・アイデンティティおよびグローバル化意識に注目している。これらについての先行研究で用いられた尺度をみると、その数は非常に多岐にわたっており、質問項目数が多い。本調査では、回答者の心理的ストレスを高める可能性のあるものや政治的・宗教的な問題を排除するよう考慮して、アイデンティティやそれへの相互影響要因や傾向を明らかにするための項目を最小限に選定・作成した。質問紙の構成は、基本属性6項目、生活・教育観について5項目、「国への誇り」1項目、グローバル化意識項目群6項目、民族・地域アイデンティティ項目群12項目である。本調査において質問紙に含んだ尺度は、以下のとおりである。

① 基本属性、言語、テレビ番組、島外経験、教育観、影響度意識

アイデンティティに影響を与えると考えられる基本属性として、性別、年齢、学歴（保護者のみ）、職業（保護者のみ）、出身地、アンボン居住年数、宗教、アンボン語使用程度、視聴テレビ番組、アンボン外への渡航経験、また教育的な影響要因として自身への家族、教師、本、宗教家などからの影響に関する意識、学校における教科に対する重要度意識を尋ねた。アンボン島の主な民族はアンボン民族（suku Ambon）と

いわれ、アンボン島、リーズ諸島、セラム島、ブル島などに居住している。もともと無人島だったアンボン島に、セラム島、北マルク、東ジャワ、南・東南スラウェシ、イリアンジャヤから長い年月をかけて移り住み、定住していった人々だとされている⁷。現在でも他島からの移住は続いているため、本調査では出身地と居住年数を聞いている。

② 民族・地域アイデンティティについて

ローカル・アイデンティティは、地域開発において非常に重要であることが多くの先行研究によって指摘されている⁸。まさにアンボンでもローカル・アイデンティティの再構築が紛争後の地域再生のために目指されており、それを個人レベルのアイデンティティとすることで地域の平和と開発につなげようとしている。社会メディアや教育現場では、「美しいアンボン」「兄弟文化」をアンボン・マルクに住む諸民族の共生文化としてシンボリックに描き、伝達しようとしている⁹。そのため、アンボンのローカル・アイデンティティは、エスニック・アイデンティティと大きく重なる部分がある。先に述べたように、インドネシアではローカル・アイデンティティは、エスニック・アイデンティティから政治性を排除したものとして形成されてきている¹⁰。また、アメリカンインディアンのケースでも、エスニック・アイデンティティは「共有される文化的信念、価値観そして実践といったローカルの基盤となる文脈に重要な影響を与える」ものであるとみなされる¹¹。ローカル・アイデンティティの下位概念には、地域に対する愛着、誇り、思い、記憶、活動などがあり、地域の歴史的・社会的状況に合わせて調査指標の開発が試みられている。ただし、具体的な調査項目をみると、アンボンではセンシティブな内容が含まれている¹²。そこで、本調査では、民族と地域アイデンティティを統合して測定することとし、地域への愛着に関しては、居住している町、島、国、アジア、世界を比較して愛着を感じる順番を回答してもらい、それ以外については、エスニック・アイデンティティについては現在最も汎用性が高いと評価されているフィニーのMEIM (Multigroup Ethnic Identity Measure) を用いることとした¹³。エスニック・アイデンティティ測定尺度は、個人のメンバーシップを測定するものであるというフィニー自身の解釈からもアンボンの人々のローカル・アイデンティティを測定するのに妥当であると考え¹⁴。フィニーの尺度を翻訳する際、‘own ethnic group’ という用語は Ambon と翻訳した。アンボンでは、民族名も居住する島も名称は同じくアンボンである。

③ ナショナル・アイデンティティについて

本調査では、ナショナル・アイデンティティに直接関係する項目として「あなたは国家に誇りを抱いていますか」というナショナル・プライドの設問を用いた。ナショ

ナル・アイデンティティの概念は研究者によって多様に定義されているが、ナショナル・アイデンティティの国際比較研究を大きく推進させた田辺はそれを「人々がネイションとの関わりの中で抱く意識一般」として広義に捉えた上で、4つの下位概念「ネイションの成員条件」「ナショナル・プライド」「自国中心主義」「排外性」に区分している¹⁵。本調査では、「自国中心主義」と「排外主義」についてはグローバル化支持意識に関する項目において、「成員条件」としての愛着については地域から世界までの心理的距離の近さに関する項目によって把握できていると考え、最小限の項目に限定した。以下、分析記述では「ナショナル・アイデンティティ」とは読み替えず、設問のとおり「国への誇り」と記す。

④ グローバル化意識について

本調査では、East Asian Social Survey (EASS)におけるグローバル化に対する意識についての6項目（経済、雇用機会、環境、輸入制限、国益追及、自国文化への影響）を用いた¹⁶。

3. 調査結果と分析

(1) 基本属性、言語、テレビ番組、島外経験、教育観、影響度意識

回答者の全体的な基本属性は以下のとおりである。調査対象者には、若干名のジャワ出身者もいたが、本稿では特定地域内での世代間の違いに焦点を当てるため、マルク州以外の出身者を省き、アンボンおよびマルク出身と回答したもののみを分析対象とした。その結果、有効回答者数は、生徒 153 名、大学生 89 名、保護者 I 79 名、保護者 II 51 名である。子どもとの関係は、保護者 I は父親 29 名、母親 42 名、その他 8 名、保護者 II は父親 27 名、母親 21 名、その他 3 名。職業は保護者 I は公務員 23 名、漁業 1 名、農業 12 名、その他 43 名、保護者 II は公務員 25 名、漁業 1 名、農業 8 名、その他 17 名である。学歴は、保護者 I は小学校 2 名、中学校 3 名、高等学校 57 名、大学 17 名、保護者 II は小学校 7 名、中学校 4 名、高等学校 20 名、大学 17 名、無回答 3 名である。アンボン居住年数で 5 年以下の人は、中学生で 16 名、大学生で 34 名、保護者 I で 4 名、保護者 II は 0 名であった（合計 54 名）。そのうち 27 名はアンボン出身者であり、これらの人々は抗争期に避難生活を続けていたか、親の仕事のために島外で生まれ育った年数が長かったと考えられる。出身地は、中学生でアンボン 136 名に対してマルク 17 名と圧倒的にアンボン出身が多いが、大学生はアンボン 48 名に対してマルク 40 名、保護者 I はアンボン 63 名にマルク 16 名、保護者 II はアンボン 46 名にマルク 5 名である。宗教は、中学生（プロテスタント 136 名、カトリック 7 名、イスラム 9 名、以下同様）、大学生（70 名、2 名、16 名）、保護者 I（74 名、2 名、3

名)、保護者Ⅱ(45名、3名、3名)であった。これは調査対象中学校がプロテスタントの多い地区となってしまったためである。地域や国家に対する意識に大きな違いが出るとは考えにくい、グローバル化に対しては何らかの違いがあるかもしれないため、今後の調査の課題としたい。

① 言語使用状況

アンボン語が「使える」と回答した比率は、中学生95.3%、大学生96.4%、保護者Ⅰ94.7%、保護者Ⅱ92.2%であった。世代に関係なくほとんどの人が使える。アンボン語は地域科においても教授科目とされなかったが、日常用いるアンボン語はインドネシア語と類似しているため、言語の問題はさほど大きくない。

② 好んで視聴するテレビ番組

テレビ番組について、インドネシア番組、アジア番組、西欧番組の中で最も好んで視聴する番組を一つ選択してもらった。世代別に比較してみたところ、保護者世代は最もインドネシア番組を好んで視聴しており、保護者Ⅰで81.0%、保護者Ⅱで84.6%であった。大学生はインドネシア番組を好むものも半数近いが(46.6%)、他の世代と比べて西欧のテレビ番組を好んで視聴しており(31.8%)、アジア番組を好む割合が保護者世代よりは高めである(15.9%)。中学生はその中間に位置し、インドネシア番組を選択したのは63.3%、西欧番組は16.7%、アジア番組は15.3%であった。

③ インターネット使用頻度

インターネット利用頻度について、「使わない」「あまり使わない」「時々使う」「よく使う」で聞いたところ、「時々使う」「よく使う」を合わせると、大学生が使う頻度が最も多く(81.8%)、次いで中学生(55.8%)、保護者Ⅱ(58.4%)、保護者Ⅰ(47.2%)の順であった。保護者世代のネット使用頻度が思った以上に高い。保護者の職業を見ると公務員が多く、職場での使用も増えてきており、Facebookを用いる人も増加していることが影響していると考えられる。

④ アンボン島外の経験

アンボン島外の経験について、マルク州、インドネシア、海外の三つについて複数選択をしてもらった。アンボン島外の経験としては、仕事や旅行以外に、アンボンの場合にはオランダの親戚訪問や抗争期の避難などが考えられる¹⁷。また、そもそもアンボン島外のマルク州出身者も含まれており、中学生では17人、大学生は40人、保護者Ⅰは17人、保護者Ⅱは6人が島外出身である。その人数を考慮しても、中学生の島外経験は最も多く、マルクに97人(同世代中63.4%、以下同様)、インドネシアに

34人(22.2%)、海外に5人(3.3%)となっている。ついで保護者Ⅱが多く、マルク26人(50%)、インドネシア17人(32.7%)、海外1人(2.0%)。保護者Ⅰは、マルクに39人(48.8%)、インドネシア18人(22.5%)、海外4人(5.0%)であった。大学生は、マルク42人(47.2%)、インドネシア26人(29.2%)、海外3人(3.4%)であった。

⑤ 所属意識

「あなたは一番どこに所属していると感じますか」という質問をし、町、アンボン、マルク、インドネシア、アジア、世界の項目について、強く意識するものから順に1から6までを記述してもらった。各世代において順位付けに一致性があるかどうかを見るために、ケンドールの一致係数に関する検定を行った。その結果、中学生(N=145、W=0.769、p=0.000<有意水準0.05)、大学生(N=72、W=0.841、p=0.000<有意水準0.05)、保護者Ⅰ(N=50、W=0.332、p=0.000<有意水準0.05)、保護者Ⅱ(N=35、W=0.561、p=0.000<有意水準0.05)といずれの世代にも順位に一致性があった。順位の平均ランクを見ると、町から世界までの順に、中学生(町1.31、アンボン2.36、マルク州3.12、インドネシア3.48、アジア5.05、世界5.69、以下同様)、大学生(1.37、2.06、2.90、3.92、4.94、5.81)、保護者Ⅰ(2.41、2.73、3.16、3.32、4.34、5.04)、保護者Ⅱ(1.77、2.33、3.29、3.57、4.57、5.47)となっており、どの世代においても町、アンボン、マルク、インドネシア、アジア、世界の順で一致性がある。

⑥ 教科重要度意識

教科について、大切だと思う順に三つ選んで順番を書いてもらった。教科は、公民、インドネシア語、数学、社会科、理科、体育、芸術、地域科である。1番目を3点、2番目を2点、3番目を1点として換算し、平均値を比較したところ次のような結果となった。中学生が重要だと感じる教科の上位3教科は、理科(2.34)、公民(2.16)、インドネシア語(1.78)であり、地域科は(0.12)と最も低い。大学生は社会科(2.54)、公民(2.06)、理科(1.88)の順である。保護者Ⅰも公民(2.56)が最も高く、理科(2.4)、社会科(2.0)と続き、保護者Ⅱも公民が2.88と4世代の中で最も高く、理科(2.24)、社会科(2.22)の順に重要としている。スハルト政権後もなお公民科が各世代において非常に重要視されていることが分かった。

⑦ 影響度意識

「自分が最も影響を受けている人やモノは何だと思いますか」という質問に対して上位3つを選んで順位を書いてもらった。選択肢は、両親、友人、教師、地域、宗教家、本、テレビ、家族である。1番目を3点、2番目を2点、3番目を1点として、世代別に平均値を求めた。中学生は、両親が最も高く(2.28)、次いで教師(0.79)、友

人 (0.73) と続いている。大学生も両親が最も高いが (2.62)、次いで家族 (0.88)、友人 (0.62) となっており、教師の影響は低い (0.45)。保護者 I は、最も影響が高いのは両親 (1.99)、次に家族 (0.69)、教師であるが (0.60)、中学生や大学生と異なり友人の影響が非常に低い (0.31)。保護者 II も保護者 (2.25)、家族 (0.72)、教師 (0.69) の順になっている。宗教間の抗争修復時には宗教家による活動が大きな影響力を持ったとされていたが、宗教家による影響が 0.09 (中学生) から 0.15 (保護者 36-45 歳) までとほとんど上位 3 位に選ばれていない。

(2) アイデンティティおよびグローバル化支持意識

以下、アイデンティティおよびグローバル化意識についての特徴について検討する。まず、上述した基本属性 (性別、言語、学歴、職業、TV、インターネット、島外経験) との相関であるが、世代によって TV 視聴やインターネット利用度も大きな差があるものの、アイデンティティや意識との相関は見られず、世代のみ有意差が見られた。

① 民族・地域アイデンティティ

民族・地域アイデンティティの傾向を把握するために、12 項目について主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、3 因子構造が判断された (表 1)。しかし信頼性係数は、第 1 因子では 0.782、第 2 因子では 0.693 あるものの、第 3 因子は 0.416 と低い。ただしこの 3 番目の因子に含まれる二つの質問項目は、復興期の地域の人々がどのように自分の使命や影響を感じているのかを問うものであり、発達段階も視野に入れてみた場合にどのような違いが結果として出てくるのかが注目されるため、因子としてそのまま扱うこととした。因子名は、第 1 因子「民族・地域 (愛着)」、第 2 因子「民族・地域 (探求)」、第 3 因子「民族・地域 (影響)」と命名した (この節では、以下「愛着」「探求」「影響」とのみ記述する。)

表 1 因子分析結果

	I	II	III
5 私は自分がアンボンの一員でよかったと思う。	.850	-.123	.064
11 私はアンボンに強い愛着を感じる。	.825	-.072	-.076
12 私はアンボンの文化やアンボン人としての出自を心地よく感じる。	.808	.052	-.112
6 私はアンボンに所属しているという強い自覚がある。	.668	-.062	.173
3 私は自分の民族的出自と、その自分にとっての意味について、明確な自覚を持っている。	.426	.211	.064
9 私はアンボンの人々が作り上げてきたアンボンの文化を実践している。	.141	.661	-.077
1 私は、アンボンの歴史、伝統、慣習をさらに学ぼうと時間	-.044	.607	-.255

を使ってきた。

8 自分の民族的出自をもっとよく知るために、私はほかの人とアンボンについてしばしば話をすることがある。	-.256	.603	.189
2 私は、アンボンの人が大部分を占める組織や社会集団で活発に活動している。	.058	.497	.259
10 私は、アンボンの特別な食事、音楽、慣習といったアンボンの文化を実践している。	.379	.474	.002
4 私は自分の人生がアンボンの人々にどのように影響するかよく考える。	.073	-.083	.773
7 私はアンボンの一員であるということが自分に与える意味をととてもよく理解している。	-.027	.027	.755

因子間相関	I	II	III
I	-	.434	.268
II		-	.237
III			-

表2 民族・地域意識についての記述統計量

		N	M	SD
民族・地域意識（愛着）	中学生	149	3.63	0.36
	大学生	88	3.54	0.50
	保護者Ⅰ	76	3.53	0.40
	保護者Ⅱ	45	3.52	0.38
	合計	358	3.57	0.41
民族・地域意識（探求）	中学生	151	3.36	0.39
	大学生	88	3.17	0.60
	保護者Ⅰ	75	3.18	0.54
	保護者Ⅱ	47	3.23	0.48
	合計	361	3.26	0.50
民族・地域意識（影響）	中学生	152	2.81	0.71
	大学生	88	3.18	0.59
	保護者Ⅰ	76	2.95	0.61
	保護者Ⅱ	48	3.04	0.53
	合計	364	2.96	0.66

3 因子の記述統計量をみると（表2）、各項目の全体の平均値（「まったくそう思わない」1点から「とてもそう思う」5点）は、「愛着」が最も高く（3.57）、次いで「探求」（3.26）、「影響」（2.96）となっており、比較的高い。

次に世代間による差に関する分散分析を行ったところ、「愛着」には世代間の有意差は見られないが、「探求」($F(3, 357) = 3.48, p < 0.05$)と「影響」($F(3, 360) = 6.69, p < 0.01$)には有意な差が見られた。

Tukey の HSD 検定による多重比較を行ったところ、世代間の平均値の間に1%水準

で有意な差が認められた。「探究」と「影響」ともに中学生と大学生の間に有意差があり、中学生は「探究」が高いのに対し、大学生は低いことが分かった。

これは中学生が地域科の授業を中心として地域に関する活動が多いことが影響していると考えられる。対象中学校では、地域科において地域の伝統的な舞踊や料理を学び、課外授業ではアンボンの歴史についての演劇の練習と州の文化コンテストへの参加を行っており、社会科での地域の歴史学習と歴史博物館見学、自分自身の社会化と文化化についての探究型学習を行っている。演劇は2時間にわたるもので、有志生徒100人を募って半年かけて練習を行う大掛かりな活動である。社会化と文化化に関する学習では、自分が受けた影響を振り返り影響を受けたもの（写真や雑誌の切り抜き）を用いてA4サイズのポスターを作製させている。家族で購読している軍隊の雑誌の切り抜きばかりを用いている生徒、マクドナルドやケンタッキーの広告や西欧人のモデルの切り抜きで用紙がいっぱいになる生徒も40人クラスで1, 2名いるものの、多くはアンボンの伝統行事への参加の写真、民族衣装をまとった家族の写真、地場産業である漁業の様子を写す生徒が多い。このように多様な学習場面で、長い時間をかけて地域（民族）の探究活動を行っている。大学生は地元から離れて生活していること、大学ではそのような活動があまりなく、参加する機会がないことが影響していると考えられる。

「影響」については、大学生は高いのに対し、中学生は低い。しかし、地域への役割意識や影響感覚は年齢が高いほど強いかと言えばそうではないようで、保護者世代はそれほど高くない。大学生は、小中学生のように地域に関する授業や活動への参加していないが、全ての学生には地域での社会貢献活動が必修科目として義務付けられており、自分の専攻を活かして地域開発に貢献する活動し、それを卒業論文にも反映させる仕組みがある。社会に出る準備期間にある大学生の特徴を示しているといえよう。

② 国家への誇り

「あなたは国家に誇りを感じていますか」という質問に対して、「全く誇りに思わない」から「とても誇りに思う」まで5件法で聞いた。全体の平均値は、4.72と非常に高い¹⁸。

世代別の差を分散分析の結果、1%水準で有意差が見られた ($F(3, 363) = 4.67, p < 0.05$)。TukeyのHSD検定による多重比較分析を行ったところ、中学生と保護者(46歳以上)との間に1%の有意差が見られ、保護者の2世代の間にも5%水準の有意差が見られた。中学生は国への誇りの数値が高い(4.82)のに対し、保護者46歳以上は比較すると低い(4.43)。保護者46歳以上が最も強力に国家統合教育を受けていたはずであり、教科の重要度意識でも最もパンチャシラ公民教育を重視しているにも関わら

ず、国への誇りへはつながっていないようである。なお、保護者Ⅰは中学生と変わらず高く 4.77、大学生は 4.66 であった。コンピテンシー教育によって、盛んにグループによる課題分析学習、発表、討論が組み込まれるようになったが、これまで学校観察をする中で、国家体制への批判的思考の育成は見当たらなかったことから、国家に対する誇りは変わりなく継続的に育まれていることの結果であると推測される。

③ グローバル化意識

グローバル化に対する意識については、まず「ヒト・モノ・カネなどが、国や地域を超えて動くことが増えています」とグローバル化の説明をし、それが経済、労働市場、国家環境に対して与える影響をどう考えるかについて、「とても悪い」から「とても良い」までの 5 件法で質問をした。全体の傾向としては、経済について 2.94、労働市場について 2.79、国家環境について 2.74 であった（表 3）。「他の国々と対立するとしても自国の国益を追及すべきだ」の質問（「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の 5 件法）では、平均値は高めである（3.12）、「自国の経済を守るために外国製品の輸入を制限すべきだ」は非常に低く（1.83）、「外国の映画や音楽、本に触れる機会が増えることで自国固有の文化が損なわれている」も低い（2.55）。

先行研究におけるインドネシアにおけるグローバル化および意識の研究では、ジャワを中心とした多国籍企業の国境を越えた進出とそれに伴う地元企業の成長が一般的にあげられ、アジア通貨危機による IMF（国際通貨基金）の経済支援とそれに伴う統制によるネガティブ影響はさほどないといわれている。またアンボンの歴史を見ると、その成り立ちにおける植民地宗主国オランダへの親和性や華人、アラブ、ジャワ商人や移民の受け入れなどの開放性が見られ、グローバル化には支持意識が強いのではないかと仮説を持っていた。しかし、本調査の結果からは、国益を守る意識は強く、全体的にはさほど脅威とも感じていないが、歓迎もしていないことが分かった。

世代別にみると、中学生のグローバル化による「文化悪影響」意識は最も高く（2.86）、「国益追求」も高い（3.16）ことから、比較的排外主義的なナショナル・アイデンティティの傾向を示しているといえよう。大学生は、経済や労働市場についてはポジティブで（3.15, 3.11）、文化的な悪影響があるともさほど感じておらず（2.24）概ねポジティブである。保護者Ⅰは国益追求が世代間で最も高いが（3.27）、それ以外の項目については保護者Ⅱと同様に中庸である。

表 3 グローバル化意識に関する記述統計量

		N	MEAN	SD					
経済	中学生	153	2.90	1.21	輸入制	中学生	153	1.65	.80

	大学生	78	3.15	0.76	限	大学生	88	1.86	.85
	保護者 I	76	2.79	0.94		保護者 I	78	2.03	.93
	保護者 II	46	2.96	0.92		保護者 II	49	2.00	.89
	合計	353	2.94	1.03		合計	368	1.83	.86
労働市場	中学生	152	2.68	1.34	国益追	中学生	153	3.16	.80
	大学生	75	3.11	0.73	求	大学生	88	2.98	.77
	保護者 I	78	2.65	1.03		保護者 I	78	3.27	.77
	保護者 II	46	2.89	1.08		保護者 II	50	3.06	.89
	合計	351	2.79	1.14		合計	369	3.12	.80
国家環境	中学生	153	3.03	1.01	文化悪	中学生	152	2.86	1.19
	大学生	78	2.21	0.83	影響	大学生	88	2.24	1.05
	保護者 I	77	2.71	1.02		保護者 I	77	2.31	1.03
	保護者 II	47	2.72	1.14		保護者 II	49	2.57	.91
	合計	355	2.74	1.04		合計	366	2.55	1.12

次に、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、表4のように2因子が抽出された。

表4 グローバル化意識に関する因子分析結果

	I	II
経済	.813	-.018
労働市場	.761	-.013
国家環境	.733	.039
国益追求	-.037	.734
輸入制限	-.020	.622
グローバル化文化悪影響	.067	.622
因子間相関 I		0.025

尺度作成で参照した濱田論文でも、グローバル化に関する意識測定尺度の6項目を因子分析し、4カ国に共通して2因子を抽出していた(23)。ただし本稿で抽出された2因子の信頼係数は、第1因子は0.667であるが、第二因子は0.317と信頼性が低い。そこで、以下のアイデンティティとの相関分析では1因子のみを用いることとし、「グローバル化支持」と命名した。

おわりに

— 民族・地域意識、国への誇りおよびグローバル意識の相関 —

本稿ではアンボンの人々の抱く国への誇り、民族・地域アイデンティティおよびグローバル化支持意識について、世代間の違いに注目してその特徴を捉え、社会変動と

教育の影響を検討してきた。

最後にまとめにかえて、各世代の民族・地域意識、国への誇りおよびグローバル意識の関係について検討したい。

アイデンティティは、複数のそれが相殺しあうような場合は、アイデンティティの危機を招くが、逆に互いに補完し合う場合、より強固な自己確立ができるという¹⁹。先行研究においては、インドネシアのナショナル・アイデンティティと民族・地域アイデンティティは同時に高めあってきたと指摘されているが、地域・民族、国家、他国からの影響において複雑な特徴を有するアンボンにおいて、人々の中で、それらはどのような関係にあるのだろうか。以下、民族・地域意識の3因子、「国への誇り」、およびグローバル化意識（上述した1因子「グローバル化支持」）について相関分析した結果を見ていくこととする（表5）。

表5 世代別にみるアイデンティティおよび意識間の相関分析結果

中学生	E/L 探求	E/L 影響	国への 誇り	グロー バル化 支持	大学生	E/L 探求	E/L 影響	国への 誇り	グロー バル化 支持
E/L 愛着	.416**	.070	.276**	.188*	E/L 愛着	.707**	.528**	.452**	.157
E/L 探求		.302**	.209*	.187*	E/L 探求		.515**	.204	.101
E/L 影響			-.042	-.005	E/L 影響			.136	.118
国誇 り				.033	国誇 り				.048

保護者1	E/L 探求	E/L 影響	国への 誇り	グロー バル化 支持	保護者2	E/L 探求	E/L 影響	国への 誇り	グロー バル化 支持
E/L 愛着	.560**	.466**	.208	.188	E/L 愛着	.620**	.408**	.231	-.155
E/L 探求		.437**	.166	-.034	E/L 探求		.418**	.250	-.136
E/L 影響			-.015	.009	E/L 影響			.002	-.157
国誇 り				.003	国誇 り				.150

**．相関係数は 1% 水準で有意（両側）

*．相関係数は 5% 水準で有意（両側）

注：表中の E/L は、「民族・地域」を示す。

すべての世代において、「国への誇り」と「グローバル化支持意識」との間に相関がなく、相互に影響を与えていないことが分かる。また中学生は民族・地域（愛着）

と（探究）、大学生は民族・地域（愛着）と「国への誇り」に相関が見られる。一方、保護者世代は2世代共に「民族・地域」の3因子すべてと「国への誇り」「グローバル化支持意識」との間に相関関係が見られない。この世代は地域に関する教育もグローバル化に関する教育も受けていないため、地域・民族、国家、グローバル化という複数のアイデンティティが補完しあう状況を生み出せなかった可能性があるかもしれない。この点については、今後さらに分析を深める必要がある。

今後は、社会変動と教育がアイデンティティに与える影響についての関係性をより直接的に問う質問を設けるなどの調査項目の改良を行い、さらに地域による教育の特徴と人々のアイデンティティの様相の関係性を検証するために、地域間の比較考察を行っていきたい。

1 アンボン、インドネシアでは開発が遅れている東部に位置する小さな島を指すが、オランダ植民地時代にマルク州における港湾都市として発展し、現在はマルク州都、東部インドネシア最大の都市の一つである。アンボン市域は377km²、人口428,585人（2007）。アンボン市公式HP：http://www.ambon.go.id/index.php?option=com_content&view=article&id=2&Itemid=9（2014年7月18日）

2 鏡味治也（編著）『民族大国インドネシア』木犀社、2012年。

3 インドネシアを対象国に含む価値観に関する実証研究としては、「国際社会調査プログラム（ISSP）」「世界価値観調査（WVS）」「アジア・バロメーター」「アセアン・バロメーター」、平田利文（研究代表）他によるASEAN諸国における児童生徒の市民性に関する国際比較調査などが行われている。これまでの国際比較調査については、調査が都市部に限られているなどの課題が指摘されている（湊邦生「東アジアにおける国際比較社会調査とその課題—世界価値観調査、ISSP、アジア・バロメーター、東アジア価値観国際比較調査からEASSへ—」大阪商業大学比較地域研究所JGSS日本版General Social Surveys研究論文集[6]JGSSで見た日本人の意識と行動JGSS Research Series No.3）。また、対象も20歳以上であるため、中学生との世代間比較ができない。平田利文（研究代表）によるASEAN諸国における市民性調査では、知識・理解、能力・技能、価値観・態度について、ローカル、ナショナル、グローバル、ユニバーサルのレベルで市民性に関して調査し、教育内容とともに分析がなされている。（平田他「地域統合をめざすASEAN諸国における市民性教育」日本比較教育学会編『比較教育学研究』2013年、104-193頁。）

4 中矢礼美「インドネシアにおける地域科の成立・展開過程の研究」博士論文、1998年3月。

5 中矢礼美「インドネシアにおけるコンピテンシーを基盤とするカリキュラムに関する研究」中国四国教育学会編『教育学研究ジャーナル』第3号、2007年、19-28頁。

6 中矢礼美「インドネシア・アンボンにおける平和な文化をつくるための学校教育」日本総合学会『日本総合学術誌』第10号、2011年、55-62頁。中矢礼美「インドネシアにおける平和教育に関する研究」広島大学大学院教育学研究科教育学教室『教育科学』第28号、2011年、6-24頁。

7 Lembaga Kebudayaan Daerah Maluku, op. cit., pp. 11-12.

8 大堀研は、ローカル・アイデンティティは地域再生の重要なツールであると指摘している。（大堀研「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討」東京大学社会科学研究所、『社会科学研究』第61巻第5・6合併号、2010年、143-158頁。）

9 中矢礼美、前掲論文、2013年。

10 鏡味治也、前掲書。

11 Carol A. Markstrom, "Identity Formation of American Indian Adolescents: Local, National,

and Global Considerations”, *Journal of Research on Adolescence*, 21(2), 519 - 535, 2011.

12 向井有理子・渡部美穂子「比較文化研究—日本・ドイツ・イギリス—」向井有理子・渡部美穂子（編）『異文化受容態度：日・独・英の比較』都市文化研究センター、2003年。レヴィッカは、地域の愛着やアイデンティティについての測定尺度として12項目を設定しているが、その中には「この場所が好き」「ここにいないときに寂しい」「ここで安全な気がする」「自分の一部」「引っ越したくない」「ここにルーツがある」などを含んでいる。これらは通常の地域であれば有効だと考えられるが、現在のアンボンでは、抗争後に引越しをしなければならなかった人もいたため、不適切だと判断して用いなかった。（Maria Lewicka, “Place attachment, place identity, and place memory: Restoring the forgotten city past”, *Journal of Environmental Psychology*, vol. 28, 2008, pp. 209-231）

13 金明秀はフィニーのエスニシティ指標の有用性をこれまでの先行研究から説明している。（金明秀「エスニシティの測定論（2）」社会学部紀要第109号、2010年、pp. 83-90）フィニー自身、MEIMを用いた他の研究者らの結果もレビューしつつ調査を繰り返して適切な尺度の再構築を繰り返しており、2007年度の改良版では6項目に絞っているが、本稿ではより多くの質問項目を用いて、アンボンに適切な因子分析を行うことを目的として、1999年版（12項目）を採用した。Phinney, J., “The Multigroup Ethnic Identity Measure: A new scale for use with adolescents and youth adults from diverse groups”, *Journal of Adolescent Research*, 7, 1992, pp. 156-176. Roberts, R., Phinney, J., Mase, L., Chen, Y., Roberts, C., & Romero, A. “The structure of ethnic identity in young adolescents from diverse ethnocultural groups”, *Journal of Early Adolescence*, 19, 1999 301-322.

14 Phinney, J., Ibid, p. 302. MEINの項目は、「愛着と所属意識」「エスニック・アイデンティの達成」「民族的行動」からなるが、それぞれグループメンバーシップの感覚や態度、活動などが具体的項目であるとされている。アンボンでは偶然にも、グループとしての民族名も地域・島の名前も同じである。

15 田辺俊介著『ナショナル・アイデンティティの国際比較』、慶應義塾大学出版、2010年、41-48頁。

16 濱田国佑「東アジアにおけるグローバル化意識の規定要因」日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集(13)JGGS Research Service, No.10, pp. 105-115.

17 南マルク共和国独立運動をしていた人々は、1950年に家族とともに3万5千人がオランダに移住したままであり、アンボン抗争後にはオランダの親族からの支援も多くあったという。

18 森下稔「ASEAN諸国における市民性に関する児童生徒へのアンケート調査」日本比較教育学会編『比較教育学研究』第46号、2013年、126頁。平田らの調査で類似する質問は「国民道徳や国民としての誇りを持っている」というもので、4段階での回答の結果、「十分もっている」「持っている」の回答は59.3%にとどまっている。これは、質問が若干違う意味であることのためなのか、地域の差か、世代間の差から来ているのかは定かではない。

19 田端拓哉(他)、前掲論文。